広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	あの世からこの世へ ： 「人形」作文に見る子どものイマジネーション
Author(s)	小林, 照子
Citation	児童の言語生態研究 , 15 : 38 - 50
Issue Date	1997-01-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045174
Right	
Relation	

特集 子どもにとっての時間と空間

あの世からこの世へ

―「人形」作文に見る子どものイマジネーション―

小林照子

1 はじめに

「子どものイメージの情動における四つの仮説と一つの付説」（1985年・日本放送出版・子ども文化の原像）として、我々が予見性、邂逅性、没我性、祈祷性、瞬起性を掲げたのは11年前のことである。「穴」「留守番」「おまじない」といった題で子どもに書いてもらった作文、「闇」「手形占い」「走る」「つぼ」の実験場面でとらえた子どもの発言は、この仮説を実証するために有効であった。でき事を綴った作文とは違い、子どもの原風景ともいえるような心の声を聴くことのできる作文であった。この時すでに「人形」は仮説を実証するための有効な素材として候補に上がっていたが、まだ試行錯誤の最中だった。

今回子どものイメージ世界を構築している軸として子どもの時間観、空間観を問題にした時、再び「人形」が浮び上がってきた。知識や経験にとらわれない先験的イメージ運動をとらえるには、欠くことのできないテーマだということをあらためて実感したからである。どんな子どもでも人形を見ると心が動く。人形は子どものイメージ運動が活発になる、最も身近な小道具だと考えられる。今回のテーマに合わせると、子どもは人形によって現実にとらわれない時間観、空間観を軸としたイメージ世界に入ることができるのではないかということになる。人形によって誘引されたイメージ世界とはどのようなものなのか、イメージ運動の偏向性といったものはあるのか、といった課題を意識して、子どもの作文を分析することにした。

例1

ぼくは、人形をたくさんもらっていました。父さんからもらったものや、おばあちゃんからもらったものまで。

人形は、自分のれきしと、人生だと思います。

もうしんでしまったお父さんからかってもらった人形もまだ家にあります。

けれど、かなしい人形ばかりではありません。

たんじょう日に、いとこからかってもらった人形があります。

それは、一ばんすきだった人形でした。けれど火じのときになくなってしまいました。

今では、人形なんてとばかにしているけれど、ほんとうは、だいじなものだったのかもしれません。

ほんとうに、すきだった人形は、

◎調査協力校

2年生（44名）
茨城　石崎小　23名
神奈川　湘南白百合学園小　11名

3年生（73名）
茨城　石崎小　17名
東京　町田四小　56名

4年生（69名）
東京　八王子六小　38名
東京　聖徳学園小　31名

5年生（76名）
東京　八王子六小　38名
東京　日野南平小　38名

6年生（145名）
神奈川　横浜末吉小　32名
東京　学習院初等科　113名

火じの時も、もえませんでした。
ぼくの、いしがつたわったのかもしれません。（5年男子・八王子六小）

人形に自分の歴史が投影されるなどということが起きようとは予想外であった。ここに書きつけられた内容は本当にあったことばかりである。しかし我々がとり上げたいのは、この作文が事実に基いて書かれたか否かという問題ではなく「人形」というテーマによって引き起こされたイメージ運動が、火事、父の死別といった変事に片寄ってしまうという問題なのである。

「人形は自分の歴史と人生だと思います。」という指摘は大げさにも思えるが、子どもたちの作文を読んでいると、なるほど、人形とともに歩んだひとりひとりの人生が伝わってくる。

2 人形をかわいがる

人形は他のおもちゃとは違うようである。とにかく「かわいい」ということばがあふれている。

例2
わたしの家のねこは、もうきたないけれどとってもかわいいお人形です。わたしの小さいころのようふくをきています。とってもかわいいお人形ちゃん。
（2年女子・湘南白百合）

例3
わたしの一ばん大じなお人形は、マロンクリーム人形です。
とてもかわいくて、ねる時よこにおいてねています。
もう何年もつかっています。
きたなくなったら、ぬいぐるみシャンプーであらいます。ほんとうのお友だちみたいに、大じにしていて、いつもピカピカできれいで、ほんとうにかわいいです。
（2年女子・湘南白百合）

例4
もしもわたしがお人形だったら、くまのかわいいかわいいぬいぐるみになって、やさしいやさしい女の子にかってもらいたいなぁ。それで、ふわふわのやわらかいベットにおいてもらって、でかけるときはつれていってもらって、ねるときも、いっしょにずーっとねていました。
（2年女子・湘南白百合）

例5
にんぎょうにはいのちがあっていつもだいじにしていないとかわいそうでかなしいとおもいます。すてたりしないでいつもにんぎょうをだいじにしています。いつもいっしょにいてにんぎょうであそんだりしています。にんぎょうはかわいいにんぎょうはにんきものです。
（2年男子・石崎小）

特に2年生では人形をベタベタにかわいがっていることがわかる。かわいくてかわいくて、いつも一緒だというのである。迷いも恐れもなく人形遊びにひたりきっている。

我々は、手ばなしでイメージ運動に身をまかせること、我を忘れてイメージの世界に入り込むことを「没我性」と呼んでいるが、子どもが人形と遊んでいる状態が、ズバリ「没我性」である。

例6
わたしが小さいときに、さみしいときにいつもなぐさめてくれたリカちゃんにんぎょうは、いつもながいあいだつかっていたから、なつかしい。
でもすてられた。
かわいそうだった。
でもいまはいいのをかってもらった。
おなじだった。
よかった。とてもよかった。
いまでもあそんでいる。
わたしは、ひとりごとやいろんなことであそんだ。
リカちゃんにんぎょうはきたなくなった。（3年女子・町田四小）

例7
人形は人をモデルにしたようなものです。人形はなぐさめとあそびがかさなりあっているようなものです。
（5年女子・南平小）

「なぐさめと遊びが重なりあっている」と指摘している。次に掲げる例は、この指摘の解説とも考えられる。

例8
人形やぬいぐるみとは、一体なんだろうと思う。小さい頃、あんなに人形を好きになろうと思ったのに、今じゃ「へ」とも思っていない。人形というのは、子どものいっしゅの、あこがれだと思う。「私はこんなになりたいな」とか「こんな人と友達になりたいな」とか。ぬいぐるみは、家族みたいなもんだろう。「これかわいい」とか「このかわいいのといると安心する」とか、私は「ぬいぐるみってかわいいし安心するし、にくめないなぁ」というのが本心である。
（5年女子・聖徳）

「安心」「なぐさめ」ということばが出てくる。人形遊びには子どもの心をやすらかにする作用があるとも言えるが、我々としては子どもが、イメージ運動の実感として「安心」と言っているところを大切にしたいと思う。イメージ運動が活発であればあるほど、楽しいし、心もやすらぐのだということを、子どもは実感として持っているのだというところである。だから、次の例のように、「バカみたいだけど」と照れながらも、「今度はもっと大きいのがほしいです。」などと言えるのである。

例9
わたしは、1、2才のころに始めて自分の人形を買ってもらいました。熊の約15センチの小さな人形で、ピーピーちゃんといいます。夜なんかはよくだいてねていて、旅行の時も、一、二回持っていきました。お母さんがピーピーちゃんの耳を持つと、今でも
「耳なんか持ったらかわいそう」
などと言ってます。ピーピーちゃんは今でも持っていて、バカみたいだけどたまにしゃべりかけたりします。一年のクリスマスでは、大きいぬいぐるみをかってもらい、くまごろうとして、お兄ちゃんのおさがりの服をきせました。左がわをにらんでいて少しこわい気もするけど、けっこう気にいってます。くまごろうは一メートルほどあります。今度はもっと大きいのがほしいです。
（5年女子・南平小）

3 人形が踊り出す

かわいいかわいい人形が動き出したらいいなぁという願望を持つ子も多い。

例10
ぼくは人形がしゃべったらいいなぁと思います。なぜなら人形がしゃべったら楽しいしつまらない時に話し相手になってくれるからです。それと、人形が動いたらいいなぁと思います。なぜなら人形が動いたらいっしょに遊べるからです。それに小さな物を落としたら、小さい人形がさがしてくれるからです。ぼくは、そういう人形があったらすごくほしいです。でも動く人形でも怖い人形はいやです。なぜなら夜いきなり動きだしたら気持ち悪いからです。怖くなくて男の子の人形ならほしいです。
（5年男子・南平小）

人形遊びは女の子だけの楽しさではないことがわかる。「しゃべったらいいなぁ。」という願いにとどまらず、動き出しそうな予感を感じている子もいる。

例11
わたしのへやには、人形がおいてある。その人形は、ねこの人形がたいこをもっている人形です。
わたしは、るすばんのときとか、だれもいないとき、もし、その人形がうごきだして、たいこのおとがきこえてきたら、どうしようとおもうときがおおい。
その人形は、おばあちゃんがかってきた人形です。
その人形のもっているたいこは、なぜか、おとがうるさいのです。
この人形は、めざましどけいにもなる。
なぜかというと、たいこのところに、とけいがあるからです。それは、ふしぎに、そのめざましどけいの音は、とってもしずかなのです。なぜか、あさでなく、よるになるのです。
でも、もうだいじょうぶ、くらにしまってしまったから。
（3年女子・石崎小）

例12
わたしが家にかえったらだれもいません。るすばんつまらないなぁと思っていたら、どこからかはわからないけどだれかの声がしました。そしてその声はこう言いました。
「るすばんつまらないでしょう。いっしょにあそぼう。」
と言っていました。でもだれだかわからないしすこしこわいのでわたしはこうきいてみました。
「だれ。」
ときいたら、その子はこう答えました。
「わたしふらんす人形よ。」
でもうちにしゃべるふらんす人形なんかいたかなと思って一つ大きなふらんす人形があったのをおもいつきました。そして見にいったらありません。そしてわたしは声がしたへやにいってみて人形がいてわたしは人形をつかまえてケースのなかに入れてテープでとめました。でもまだふらんす人形は外に出たがっていて
「だしておねがいだからだしてちょうだい。」といったけれどわたしは、
「ぜったいだしてあげない。」
と言ってこんどはひもをもってきてケースをぐるぐるまきにしてケースをあけられないようにしてしまったので人形は外に出るのをやめました。」
（3年女子・石崎小）

どちらもるすばん中のでき事である。「留守番」については前の研究で、日常とは違う時間空間を感じていること、イメージ運動が活発になることが確かめられている。子どものイメージ運動が、人形を動かすのである。動き出したらどうしようもないのだろうか、倉に入れたり、ケースに入れたり、しっかり封印してしまわないと落ちつかないようである。

例13
ある日のよる人ぎょうがうごき出しました。ぼくはおしっこがしたくなったからトイレにいった。そしたらぼくのたいせつな人ぎょうがなかった。だからたいせつな人ぎょうをさがした。けれどなかったからあきらめました。あさになったらみつかった。ぼくのたいせつな人ぎょうがよかった。うれしかった。きっと人ぎょうたちはあさになったらもどってきたんだね。（2年男子・石崎小）

例14
わたしが思いうかべる人形は、小さいときよくおねえちゃんとかといっしょにやった、きせかえようの、リカちゃんや、ジェニーちゃんとか

の、たのしい、人形があたまの中にうかんできました。それでよくいっしょにおふろにはいったりしていて、ジェニーちゃんの体の中に、水とかが、はいってしまい、水をとるにもひとくろうでした。

でも、いくら、たのしい、ジェニーちゃんでも、よるになるとうごきだしてこわい思いもしたけれど、うごきだすのはほかの人形たちと、パーティーをするのだとおもって、その夜はねむれるのでした。

（5年女子・南平小）

人形たちが動き出すのは人間が寝静まる夜だというのである。人形が動くことを恐れながらも、人形が自由に動ける時間空間を設定して納得しているところが興味深い。そしてさらにイメージ運動が活発になると、人形が踊りだすのである。

例15

人形をずうっと見ていたらなんかのどがいたくなって、水をのんだ。そしたらまたのどがもっともっといたくなって、こんどは、おゆをのんだ。

そしたらすこしなおって、すこしたったらまたのどがちょっといたくなりました。

おゆをのもうと思って、のみました。そしたら、まちがって、水をのんでしまいました。

そして、がまんして、人形をみつづけました。そしたら、人形がうかんだようにみえました。

わたしは、こわくて、はなれました。

（中略）

そして、おかあさんが、

「人形がなんでうごくのみまちがいじゃないのあんた目がわるいからねてな。」

といいました。

そのまんま人形をみてました。

そしたら、こんどは、人形がおどりはじめました。

「おかあさんおかあさん。」

「なに、こんどは。」

「人形がまたうごいたんだよ。」

「どれどれなんにもなってないじゃない。」

（3年女子・石崎小）

見続けていると、人形が浮び上がり、踊り始めたという。まるで超能力を使っているかのようである。一緒にいるお母さんには見えなくて、自分だけに見えるというのも、イメージ運動の活発な子どもだけの特権とでも言っているようで愉快である。

例16

ある日ぞうのパオくんがはなたばをもっておどってた。あとふたりおにいちゃん、ボンくんとペンくんたちはひがさをもってやってきてかぜになった。ねこのぴんちゃんもおどりだしました。いぬのかいくんもはりねずみのぺんぺんくんもおどりだしてにんぎょうぜんたいおどりだして、みんなぜんぜんやめなかった。

（2年男子・石崎小）

例17

わたしのにんぎょうはたくさんあります。

それはあおもりのおじちゃんがかってきてくれたにんぎょうです。なんかわたしはおへやにいてねると「かわいがってね。ぜったいかわいがってね。」というので、かわいがってあげるといいことがたくさんおこりました。そうすると、にんぎょうがおまつりのひ、わたしがいくとおどりだします。どんどんおどりました。いつもおどりたいねといいました。どんどんにんぎょうがとびだしてにんぎょうがたくさんなので、かえってきたらぐじゃぐじゃになった。かたずけるのがたいへんになりました。

（2年女子・石崎小）

踊りが踊りを呼び踊る人形がどんどん増えている。まるで盆踊りの輪を見る思いがする。この作文を読んでいるとこれがまつりの原点なのかもしれないという気がしてくる。

「かわいがってあげるといいことがおこりました。」という点については、かわいがってあげた結果として御利益があったと理解するより、かわいがること自体に未来を予見するイメージ運動があるのだと理解するべきだと思う。かわいがること自体に「きっといいことがありますように。」という祈りもこめられているのではないだろうか。

まつりの日に人形は踊るのである。2年生の子どもにとって、人形がまつりの立て役者になることなど大きな問題ではない。子どもにとっては、イメージ運動の実感としてのおどりであり、まつりなのであろう。

4 人形が人間になる

かわいい人間、あこがれの人間は女神様になることもある。

例18

わたしの家には、かごしまのおじいちゃんがおくってくれた、大きなお人形がある。それは、ピンク色のドレスをきていて、おけしょうもしてある。とてもきれい。おじいちゃんちにも、白いドレスをきた、人形がある。ガラスのようなすきとおっているはこに入ってる。

おしろのように、きれい。

上の方は、ほこりだらけだけど、しょう面からみると中がすけてお人形が、かがみのようにうつるからいいんだ。

とってもごうかなんだ。いくらたのまれても、あの人形は、あげられない。小さいころあそんだ時、あれ

をめがみさまにしてたんだ。
（3年女子・町田四小）

女神様になった人形には名まえは付かなかったのだろうか。子どもたちは必ずと言っていいほど人形に名前を付ける。

例19

ちっちゃいときにかってもらった人形。
ねかせるとね、めをとじて、すわらせると、めがあく人形をかってもらった。小さいときだったから、ねるときも、おきてるときもずっとだいていた。たまにコップを持ってのませてあげたふりをしたり、
「おひるねのじかんですよ。」
といって、ねかせたりしていた。
かみのけがかたぐらいながいから、かみのけをむすんだりした。
わたしがつけたなまえは、はる子という名まえにした。わたしにはなまえにしたの。ごはんたべるときも、
「ごはんだよ、はる子ちゃん。」
といってたべさせるふりをした。
（3年女子・町田四小）

人形遊びの様子が詳しくわかる。ここではすんなりと「わたしにはた名まえ」にしているが、名前が決まらなくて毎日々々考え、一年後にやっと決まったものもあった。

例20

私が見たことのあるお人形は女の子のお人形です。ほっぺたが赤くてとてもかわいいです。人間だとおもってかわいがってあそんでました。
（3年女子・町田四小）

例21

六才のお誕生日に買ってもらったナンシーちゃん。
（中略）
そして、少し時間がたって、部屋に入ると、うちでかっている犬のキャリーがナンシーを落として髪の毛をかんでいるのです。それをはなすと、髪が、よだれだらけになっていたので、そっとすすいでとかしてあげました。ナンシーは、私の妹の様です。そのわけは、私には妹がいないからです。（6年女子・学習院）

例22

私は「人形という作文を書きなさい。」と言われた時、何を書こうか少しも迷いませんでした。それは、私の部屋にいつも学校から帰ると温かく愛らしい目（ひとみ）でむかえてくれるお人形、いや！お友達がいるからです。だれにも言えない困った時は必ずそのお友達、ミミちゃんに話しました。するとミミちゃんは本当にじいっと私をみつめ、何かを語りかけてくるのです。ミミちゃんは、私の心のお友達です。ミミちゃんの心は、私の心であり、私の心はミミちゃんの心でもあるのです。
（6年女子・学習院）

人間だと思ってかわいがられ、妹のように大事にされ、友達として頼りにされている。「ミミちゃんの心は、私の心であり、私の心はミミちゃんの心でもあるのです。」とあるように、人形と人間とが一心同体になっている。人形遊びの楽しさを言うとき、5年生には照れとか恥じらいといったものが見られたが、6年生になると、そういったこだわりも消え堂々と誇らしげに訴えている。
人形を人間に見立てるのではなく、自分が人形になりたいと思ったり、友達が人形になってしまったりするものもあった。

例23

わたしが人形になったらかざりとか、つけて一にんまえの人形になりたいなあと思います。
（2年女子・石崎小）

例24

人形は、ちょっとかわいいけど、ようふくをはくとかわいい。わたしも人形みたいになりたいな。人形は、おかねもちのおうちもできたりするし、かってくれる人もいるんだね。
（3年女子・町田四小）

例25

あるひ、森のなかでたつやくんのおしろをみつけた。それからごちそうをよばれました。そしたらたつやくんがにんぎょうになってた。こぶんもにんぎょうでした。そしておくじょうから水せいと木せいがぶつかるのをみました。そしてねてでていきました。（2年男子・石崎小）

水せいと木せいがぶつかるような宇宙空間で人形になった友だちにごちそうをよばれたという。また、「一人前の人形」というのはどういうことだろう。人形といえども一人の人間として認められているのである。
人間が人形になったり、人形が人間になったり、なにがなんだかわからなくなってしまった子もいる。

例26

人形は、自分の手でやらないと、うごかないのかなぁ。ラジコンみたいにそうじゅうしてうごかせば、らくできるのに、人間は足でうごくね。なんで人形は、自分の足でうごかないのかなぁ。人間とちがって人形がつくられたんだね。
人形はふつうの人形じゃないのかな。人形は、人間になっちゃえば同じ人間になれたのになぁー。じゃあ人間は人形になるようにすれば、なにがなんだかわからなくなって、まちがえちゃうから、これは、きをつけなくちゃまちがうね。
人形は、手でうごかしてもらうのがすきみたい。

例27

人形は人間に、にていて、かみの毛だって、体つきだって、みんな人間の体ににているといつも思って見ていると、ぼくが、人形になっても、ぼくは、人間と思っている。古くなって、ボロボロでも新しくても人形なら同じことだと思っています。

人形はぼくを見ていてどんなふうに思っているだろうかと思っている。目やかみのけや体だって、足だってうでだって、ほんとうに、にている。

（3年女子・町田四小）

人形が生きているのかいないのかといったことへの関心は、5年生になっても弱まらない。

例28

生きているようでいきていない。また話しているようで話していない。人形がでてくるという話は、かい談やおとぎ話、いろんな話にでて、いまは世界中どこでも見ることができます。

もしぼくとそっくりの人形がいたら人形にるすばんさせてぼくはどこかにあそびにいっちゃいます。

（5年男子・八王子六小）

例29

ぼくは、人形は生きていると聞いた時、（ほんとかなあ、なんで生きてるなんてわかるのかなあ、でも本当かもなあ。）と思ったりしました。たまに、人形がよるにしゃべるなんて聞いたけどそのことに人形が生きてんのかもしれないと思ってちょっとこわくなってきたりしました。そしてある日、いとこの家から約九十センチぐらいの子どもの人形を妹がもらったときちょっとぼくはびくっときました。でも、たまに妹が人形をあらく使ったりすると、なんとなくその人形が泣いているように思ったりすると、（やっぱり、人形は生きてんのかなぁ。）と思ったりしました。

（5年男子・南平小）

例30

小さい女の子がよくつかう人形、青いひとみのアメリカ人やいろいろな人形があるけど、ままごとにつかう人形じゃない、わら人形。人形はよくおもいつくなと思いました。

大きくなるとみりょくはないが、小さい子どもにみりょくがある。

小さい家に、小さいタンス、小さいテーブルに、小さいイス、どれも小人みたいに小さい。もし自分が人形になったら、まんぞくできずあばれだします。

人形が生きていたら、ぼくと同じことをやると思います。

ぼくが死んで生まれかわるとしたら、ぜったいに人形にはなりたくないです。

「人間の思いどおりに、なってたまるか。」です。

ほんとにほんとに人形だけはなりたくないです。

（5年男子・八王子六小）

ずいぶんとむきになっているが、現実の空間とは違うミニチュアの空間を感じて楽しんでいるようにも思える。人形の生命を考えているうちに、宇宙空間を漂うことになってしまった子もいる。

例31

もしかしたら、人形にも言葉があったり、気持ちがあれば、私達人間と、ほとんどかわりがないかもしれません。「オモチャのチャチャチャ」のうたのように、みんながねむるころになると、どこかであつまってあそんだりするかもしれません。私がもし人形であって、私をもっている人がとても大切にしてくれているのならば、私は、人形でも悲しくないかもしれません。ゆいつ、かなしいことは、話しかけられないことくらいだと思います。けれどそのうち、私のもちぬしは、大きくなって、私とあそんでくれなくなると思います。そして、あそんでくれなくなったとき、人形たちも、死んでしまうのかもしれません。あそんでくれることが、人形たちの生命のみなもとなのかもしれません。

また、人間の私達のすむ地球も、宇宙という生物のおもちゃ、ボールかもしれません。宇宙という生物のすむ所では、時間がものすごくゆっくりとながれていて地球というボールがこわれたとき、地球がこわれてなくなるのかもしれません。

私の人間という生命が終わって次に人形という生命になっても私はかまわないと思います。

（6年女子・学習院）

人形をテーマにした作文に、宇宙空間が書かれるなど予想もしていなかった。人間の生命が人形の生命としてまた再び生き続けるという展望は、イメージ運動の邂逅性に他ならない。

人形によって引き起こされるイメージ運動には現実にとらわれない時間、空間がある。そこに注目した芸能があることを指摘した子もいる。

例32

ぼくが『人形』と言われて思い付く物は、日本舞踊です。なぜかというと、日本舞踊には、人形ぶりとか、繰りとか言って、人間がまるで人形に見えるように動く踊りがあります。

それを踊る時には、先生に人形になったつもりでと言われるそうですが、感情がない物になると言うのは、とってもむずかしいことだと、聞きました。人形は人間により近く作るようにされているけど、その逆で、人間が人形により近く動くと言うのも、とてもおもしろいことだと思います。目の動き方、手の動かし方、

足のはこび方、首の動き。人間が見ならう人形は、日本舞踊の中では文楽人形、そして文楽の人形が、見ならう人間は、歌舞伎や日本舞踊の人間。それって何だかとてもおもしろいと思います。（6年男子・学習院）

イメージ運動の快感があるからこそ、芸能になったのだから、子どもの感性と芸能とがぴったりするのは当り前だが、子どもがたった一つの人形を持っただけで、文楽に勝るとも劣らないイメージ運動を展開することがわかったことをうれしく思う。

5 人形をいためつける

子どもたちが人形をかわいがり、人形がよごれてしまうことに気を使いながら、大事に大事にしていることは、前述の通りであるが、反対に人形をいためつける様子を書いたものもあった。

例33

ある日ふじえだたつやというおとこのこがいて、そのこは人ぎょうがだいっきらいだった。そのこはたんじょうびにかってくれた人ぎょうをなげとばしました。

（2年男子・石崎小）

例34

まい日ベッドにおいてあって、よるくらいときにいくとびっくりする。ときどきクッションにもする。ベッドであそんでいてふみつけたりもする。

（3年男子・町田四小）

例35

ぼくはようち園のときふじおかくんとドラゴンボールの人形であそんだ。なげたりたたかいごっこをしていた。

（3年男子・町田四小）

例36

二かいにくまの人形がありました。そのくまの人形を、ぼくがつかむと、そのくまの人形をなげて、金玉つぶしを、くりかえしました。そしたら、くまの人形は、ぼろぼろになってしまいました。こんどは、一かいにいって、うさぎの人形があったので、なげて、なげて、なげまくってしまいました。そしたら、うさぎの人形も、ぼろぼろになってしまいました。こんどは外へいって、そこには、犬の人形がありました。その犬の人形を、なげて、山のおくにとんでいってしまいました。

それで、またうちへはいろうとした。げんかんさきに、にわ鳥の人形がありました。けっとばして、けっとばしまくりました。そして、にわ鳥の人形も、ぼろぼろになってしまいました。そしてこんどは、おじいちゃんのへやにいったら、こんどは、人の人形がありました。その人の人形を、ヘッドでなん回もやって、人の人形も、ぼろぼろになってしまいました。それで、おかってに行ったら、てんしの人形があったので、外へもっていって、ちゃりんこで、つぶしちゃいました。これで、うちにある人形は、ぜんぶこわれちゃいました。

（3年男子・石崎小）

このような作文は3年生がほとんどで、4年生には見られなかった。3年生になると人形の目つきや視線に敏感になり、人形に見られることを気持ち悪いとか、こわいとかいうように感じているらしい。感じるだけでなくそのこわさに立ちむかうかのように、積極的に人形をいためつける子もいた。

6 人形にのろわれる

人形によって引き起こされるイメージ運動には呪術性がある。のろいのわら人形、首が回る市松人形、髪が伸びるお菊人形など、お得意の怪談話を思い浮かべた子も多かった。また、いとこの体験談、おばあちゃんから聞いた話を思い出した子もいた。

例37

人形とは物のなかでは一番物のけのたぐいが多そうなものです。

一つれいをあげてみますと、いとこが体けんした話です。いとこがちいさいときともだちと人形をけったり、なげたり、ふんだりしてあそんだそうです。そしてそのばんその人形がぼうっとたっていて「う～ら～め～し～や～」と、いったそう。よくじつそのともだちにそのことをいったら、ともだちもおなじたいけんをしたそうです。人形は人間とおなじように大事にしましょう。

（4年男子・聖徳）

例38

ある日、おばあちゃんがこんな事を話してくれた。

「おばあちゃんのいとこがね、小さい時、人形で遊んでいたら…」なぜか、怪だんらしいので、いとこ2人といっしょに、かたまって話をきいた。

「遊んでいるうちに、人形の首がもげちゃってね、いとこは、そんな事を気にせずに、すてちゃったんだ。すると、それから四日後の夜だった。いとこがとつぜん、くるってしまった。日に日にいとこはくるってきて、医者に行けば、さじをなげられる。」

私は、いとこと3人でかたまっていたが、もうふをもちだして、その中にくるまった。

「しかたなく、こんどは、ちがう医者に行ったら、『れいばいしをやって、体の中から悪りょうをとりのぞいてもらった方がいい。』と言う。よんでみたところ『これは人形のれいがとりついている。』と言って、それをおはらいしてもらった。するといとこは、何もなかった様に、ケロッとしていた。おまえさんたち、

人形をそまつにすると、こういうふうにたたりがあるから気をつけるんだよ。」
とおばあちゃんが言った。
今まで、れいなんていうはずがないと思っていたが、この話で、もしかしてれいというものがいるんじゃないかと考える様になった。
（4年男子・聖徳）

人形を虐待することによって生じるたたりについて敏感に反応している。呪い、逆襲といったとらえ方をしている子もある。

例39

ぼくにとっては、人形というのは、こわいという印しょうがある。人形というのは、ぬいぐるみとちがって、人の形という意味だから、フランス人形とか、ピエロの人形という印しょうがある。
人形というのは、たましいがあるのか。
よくテレビや、うわさできいたのだが、人形には呪いがある。なぜなら、人間が人形をいたずらしたり、顔の部分を引っぱったりして遊んだりするからだ。
人形というのは、かわいそうなものである。でも、これから人形が人間をおそうかもしれない。そのことを逆しゅうというのだ。人形は人間に対して、ふくしゅうという気持ちを持っているのかもしれない。
これから始まるのだ、人形の逆しゅうが。
（6年男子・学習院）

たたり、呪い、逆襲は、霊、悪霊をはらうことによってのがれられるという。人形の呪術性についての考察をした子もいる。

例40

ぼくは、人形ときくとこわいことをおもってしまう。よく人形のかみの毛がのびていたりとか、はがはえてきたとか、ぶきみなことをおもいうかべてしまう。よく、テレビとかでやってるように、この人形にはれいがついているとか、のろわれているなんていっているが……。うそではないとおもう。人形だってじぶんのいしをもっているのかもしれない。はたまた、ゆうれいがのりうつっているのかもしれない。かがくてきにかんがえてみるとそんなことありえないってかんじだけど、くうそうてきにかんがえてみると、人形はいきているのかもしれない。そうかんがえてもおかしくはない。ちょうのうりょくとかきこうとかもあるのだから、ぼくはそうおもっている。でもそうかんがえてみると、ちきゅうにあるものすべていきているようにおもえる。（5年男子・八王子六小）

科学では解明できないイメージ運動があることを主張している。そして、考えれば考えるほど命の問題に深くかかわってくる。

例41

5才ぐらいの女の子が、ごみすてばで、かわいい人形をみつけました。それで、そのこのおへやへもってきました。そのこのへやはぬいぐるみや、人形がたくさんあったのです。よるのことです。おんなのこがねているとき、にんぎょうが、うごいたのです。おんなのこが、おきたとき、ごみすてばでひろったにん形がとつぜんそのこにとびかかってきました。花子さんがあらわれて、
「ゆうれいよ、やみのせかいへ、もどりなさーい。」
そして、はなこさんが、
「あのにんぎょうわね、ずっとまえにしんだこの、人形だったのよ、たぶん、そのにんぎょうに、たましいがうつったのかもしれないわ。」
そこにいたおんなのこは、びっくりして、目がまわっちゃいました。
（3年女子・石崎小）

例42

さち子ちゃんという子のへやにうさぎの人形がおいてあります。そのことでうわさがひろがっています。そのうわさとは、夜になるとその人形がうごきだしてその人形がねている人たちのエナジーをすいとってしまうというわさが町じゅうにひろがっています。そしてつぎの日の夜さち子ちゃんは、ベッドでねました。なんと、さち子ちゃんのへやにうさぎの人形がかざってあったのです。そしてよなかの12時うさぎの人形がさち子ちゃんのエナジーをすいとったのです。そしてさち子ちゃんは、どうなったでしょう。つぎの日の朝、さち子ちゃんのお母さん、よし子さんは、さち子ちゃんをおこしにいったら、さち子ちゃんのはんのうがないのです。よし子さんは、びょういんにつれていったら、おいしゃさんは、
「しんでいます。」
と、いいました。よし子さんは、顔いっぱいになみだをこぼしながら帰っていきました。そのことをお父さんにしらせました。お父さんは、
「なんでしんでしまったのだろう。」
と、なきなきいいました。さち子ちゃんは、いまごろ天ごくでしあわせにくらしているんだろうな。
（3年女子・石崎小）

お父さんお母さんの悲しみにはあまりとらわれず、人形にエナジーをすいとられて死んでしまった女の子については「いまごろ天ごくでしあわせにくらしているんだろうな。」と思いをのばしている。例41では、「ゆうれいよ、やみのせかいへ、もどりなさーい。」と人形に声をかけて、人形にのりうつったたましいをあの世に追い返している。子どもにとって人形は、あの世と

この世の境界に存在し、あの世とこの世をつなぐ大事な役割を果しているのではないだろうか。人形があればあの世とこの世を行き来することができる。しかし一歩間違うとこの世に帰ることができないこともある。そんなところが呪術性の源になっているのだろう。だから、人形の目が気になるのである。

例43　ぼくは、人形がきらいです。人形は、ずっと目をあけて、ぼくの方を見ているようなきがするからです。

たとえば、ぼくが朝、人形をぼくのつくえの上にたたせておくと、ぼくが学校から帰ってきてもそのままたっていて、ぼくの方をじっと見て、人形が、

「おかえり。」

と言ったような気がするのです。ぼくは、人形がそんなことを言ったような気がすると気持ちがわるいので、その人形をむしして、外へ遊びに行きます。

そしてまた家に帰ってくるとどうしても気になって人形の方を見るとやっぱりぼくの方を見ているようなきがするので、ぼくはやっぱりきらいです。（5年男子・八王子六小）

この例のように「人形に見られる」ことをこわいと感じているものは多い。

例44　いよなちゃんという人形があって、よるでんきをけしてねるとき、なんかちょっとこわいし、ねるときに、わたしのかおをみてたらどうしよう。わたしがそれをみるとこわいのでいつもはんたいがわにねているよ。

（3年女子・町田四小）

例45　夜わたしがねていてベットにはいってねたら人形が目をひからせてわたしをみつめた。わたしはこわくなりふとんにはいった。人形はわたしのすぐ目のまえにいた。ベッドからでてみれば人形はすがたをけしていた。へんだと思いまたねたらまたでてきた。こんどはぜんぶの人形が目をひからせていた。

（3年女子・石崎小）

子どもたちが人形の目にこれほどまでに強い反応を示すのは、人形の目の奥につづいているあの世を感じるからなのであろう。

7　人形を流す

子どもたちが人形に特別な思いを持っているということについては前述のとおりである。そのことを考えると当然とも言えるが、「人形は捨てられない」という子が5年生、6年生に多かった。

例46　人形は、あそばなくなってもなぜかすてられない。わたしは、ぬいぐるみだってすてられない。ふるくなって今はぜんぜんつかっていない人形、ちいさいころかってもらった「リカちゃん人形」まえはよくつかっていたのに今はもう、「ようちっぽい」とか「自分のプライドがゆるさない」とか思ってるくせにすてられないの。かわいそうでもったいなくて、お母さんも「すてろ」とか言っていたけれど今はもう言わなくなった。

それにわたしが人形をすてられないわけは、もう一つあった。なぜって、なんかのろわれそうな、たたられそうな、そんなきみわるいかんじがするからだ。だからわたしは人形よりもぬいぐるみの方がすきだ。だってふかふかしていてきもちいいから。それに外国の人形とか顔がきみわるいけれど、ぬいぐるみなら、外国の方がかわいいかなっておもう方。それにテレビとかで人のかみの毛がのびるとかやっているときみがわるくなる。とくに日本人形などが多い。だからわたしはあまり人形はすきではない。でもかわいそうですてられない。（5年女子・八王子六小）

人形には呪術性がつきまとっている。「かわいがり、遊ぶことが人形の命のみなもとなのかもしれません。」（例31）と指摘している子もあったが、命と切り離せないから呪術性がつきまとうのである。だからそう簡単には捨てられない。「捨てられた人形」という題をつけて書いた子もいた。

例47　名前もない、服はボロボロ、髪の毛もグチャグチャの人形が海辺に捨てられていた。夜になっても朝になってもだれもこなかった。次の日、大雨があった。もちろん人形は海に流された。何日も、何日も。そして人形は川のほうまで流されていました。そこをいろいろな人が通りました。人形はそれを見て、命という物を知っていきました。もちろん命を知った時はもう人形ではなくなりました。人の形ではなく人だったのです。捨てられた人は歩きだした。きれいで大きい山へ。

数時間後、捨てられた人は崖に落ちてしまいました。もともと人形だったために、崖がものすごく高く感じました。崖から落ちた先には小さな小さな楽園がありました。小さな小さな昆虫たちの住みかのような物です。王はだれかって？それは『木』です。

「よ・く・き・た・な。」

木は捨てられた人に言いました。木がしゃべれて人がしゃべれないなんておかしい事はないよ。それから捨てられた人は名前を付けられて、虫たちが死んでしまい、その虫たちの子どもたちと遊び、楽しくくらしま

した。

（4年男子・聖徳）

「捨てられ、流されて、人形が人になる」というのである。この子が描いている楽園が現実世界とは事なる世界であることに注目したい。

8 人形の世界

子どもは人形によってトランスフォーメーションを起こすことができる。トランスフォーメーションとは、時間、空間を転換することによって現実にとらわれない世界を構築することである。現実にしばられずに感覚、感情を解放したときに出会うことのできる世界、入り込むことのできる世界ということなのだが、これは、調度ごっこ遊びに夢中になっている子どもを思えば思い当たる。ごっこ遊びをしなくても、人形を思うだけで、十分にトランスフォーメーションを起こすことができるのだということを子どもたちは語ってくれた。

例48

5才のたんじょう日、おばあちゃんにもらったプレゼントは、人形だった。外国せいのよこにすると目をつぶる物。おばあちゃんは

「かわいいでしょ。」

といってくれたが、はっきり言って少しこわかった。小さいころ見た人形のこわいえいがを思い出したからだ。おいかけられるような気がした。ねる時も、ガラスにうつるそのかおがこわかった。でも

（こんな事考えるとよけいこの人形はおこるかも。）

そんな気持ちで、私は、この人形に"りさちゃん"と名前をつけ、かみをむすんであげた。こうすると、昼間はかわいい。でもやっぱり夜はこわい。いつもタオルをかぶせたり、目をとじたりしている。そんなとき、この人形がゆめに出てきたのだ。それは、こんなものだった。人形の目は、私をじっと見ている。ふうけいは、どこかの田んぼのようだった。するときゅうに、その人形が、田んぼにうまっていくのだ。きょうふのあまり私はゆめの中でにげようとしたが、にげられなかった。足が思うように動かなかったからだ。ついに、人形に足をつかまれてしまった。夜中の3時ごろ私は目がさめた。ふとみると人形はいつものように目をつぶっていた。このことはやっぱり私の"こわい"という気持ちからできたんじゃないかと思った。今考えると、おかしいけど、あの時はほんとうにこわかった。あの人形の思い出は、はっきりとおぼえている。

（5年女子・南平小）

このような「人形の夢」はいくつもあったがどの夢も約束したように、人形に追いかけられたり、おそわれたりして、必死に逃げるというものだった。

例49

ある日、人形が、へやにありました。それで、人形が一人の人をどこかにとばして、一人の人が、おばあかについておばけにおそわれて、こんどは、おばけにぱんちをされて、どこかにとんでって、こんどはうみについて、こんどはさめにおそわれて、くじらに食べられて、くじらが、しおをふいて、こんどはうちゅうにいって、もくせいのうえにのっかって、こんどはうちゅう人においかけられて、うちゅう人にまたぱんちをされてこんどは、アフリカについて、こんどはライオンにおいかけ回されて、とまったら、ぶつかったら、こんどはふとんのなかにいました。これはゆめでした。（3年男子・石崎小）

ずいぶんと派手に空間移動をしている。次から次へと移動をくりかえし、ふとんのなかにもどったところで終わっている。夢からさめたということだろう。

例50

ある日、ぼくはかくれんぼをしていた。おしいれのおくのほうにいた。穴があった。はいってみた。まっくらだった。たかいライトつきのうで時計をもっていたのでそれですこしあかるくなった。ずっとあるくとかいだんがあった。おりてみた。またすこしあるくと滝上君がいた。

「やあ、タッキー。」

といった。なにもいわなかった。やけにむ口で顔がいつもの滝上よりもかっこいいと思ったら人形だった。すこしいくと中根がテストのいい点とったとき、悪い点とった人をわざとらしくわらっている時の中根がいた。それも人形だった。またあるいていくと、しんちゃんが

「ヌー。」

と、いってよってくるときの人形もあった。でもなんと見たこともないこうけいがあった。それは、滝上のまわりにせいじかとかえらい人たちや滝上のしっている人たちが滝上にむかってどげざしている人形があった。ずっとみてると人が人形をつくっていた。ぼくがどげざしてるところをつくっていた。へんなかおした滝上だった。ぼくはしんちゃんの人形をもって

「ヌ〜。」

といって滝上にちかずいた。滝上は消えた。ぼくはおしいれの中にいた。

（4年男子・聖徳）

白昼夢なのだろうか。穴に入るところからトランスフォーメーションを起こし、現実にとらわれない世界に入っている。この他にも人形が穴に落ちたり、風が吹いて黒い穴にすいこまれ、

そこで人形に会ったりするものもあった。留守番、夢、穴と、我々が今までの研究で取り組んできたテーマが、次々に現われて来るからうれしい。どのテーマも子どものイメージ運動をつかまえるために探り当てたものばかりなのだが、子どもにとっては、どれもトランスフォーメーションを起こす際の重要なきっかけになっていることがわかる。

例51

四年生か五年生の始めの時か三組のひろしとその他五人くらいであき家に入った。中は人がいそうだった。ゆかにお皿がいっぱいおいてあり、左のへやにはズボンがほしたままだった。台所の水道をひねった。キュッ。でも水は出なかった。右のへやへ、目をやった。ひろしが、

「うはっ。」

と小さな声でかけたとたんぼくの目に、おそろしい人形があった。目が白く光っていて、体が毛ムクジャラだった。少しこわくなって

「帰ろう。」

といって帰っていった。ぼくは、おいてあったメモのうらを見て、

「1987年。……によにげしたんだな。」

そしてそのメモにペンでためし書きしてから『94年○月○日、出る　長谷川』

と書きのこして、その家をさった。

そのこわい人形は、なんだったんだろう。　（5年男子・八王子六小）

白昼夢か、作り話か、などということは問題ではない。時間にこだわり、なんとか時間をつかまえようとしているところを大切に見たい。

例52

オルゴールの人形がボールを持って音楽にあわせておどっている。

私が、ようちえんに行っていることろ大好きな先生がいた。

いつもやさしくて、美人な先生。

けど今はガンで死んでしまったけれど、その先生からもらった。

そのオルゴールの人形が音楽にあわせておどっている。

その先生にぴったりあう音楽でおどっている。

やさしくてキレイな音楽。

今でもわすれない先生の音楽。

一日一回は聞く音楽。

くびをかしげながら、白黒のぼうしふくをきて、真っ赤なくつをはいて、赤いボールをもっていて、音楽にあわせておどっている。おはなが真っ赤な、カワイイピエロの人形。

（5年女子・八王子六小）

踊る人形によって、オルゴールの音楽によって、今は亡き先生の思い出がよみがえってくるのだという。思い出の快感は、イメージの邂逅性だといえる。

9 人形とともに生きる

5年生、6年生になると、人形と思い出がからみあってくる。

例53

人形、にんぎょう、ニンギョウなど、色々と書き方があるが、人形、一つ一つに心、感情がある。

たとえば、小さい時から自分のつくえにおいといた、20㎝ぐらいの人形。ほこりでよごれても、なかなかすてる事が出来ない。これはこの人形が思い出を作っている、思い出をのせているからである。もう一つは、「情がうつった」という言い方をするがそうである。つまり「情」とは「思い出」である。その人形が、ていねいに作ってあればあるほどこの「思い出」「情」が出来る。それは、人形じたいが、感情を持っているからである。

私は「人形」はあまり好きではないが、仲のいい人とか親せきに人形・ぬいぐるみをもらうと、これまた、なかなかすてられない。「人形」は他人の思い出もはこんでいるのである。いやな思い出も、楽しい思い出も…。　（5年女子・聖徳）

4年生でさかんに感じていた呪術性とは、感じ方が違っている。

例54

ぼくは、小さいころウルトラマンが好きでウルトラマンの人形をたくさん持っていました。ウルトラマンの人形とかいじゅうの人形でたたかわせたり、二つの人形を台の上にのせて、台をたたいてすもうをしたりもしました。でも、ほかの人形は買わないでウルトラマンの人形しか買っていませんでした。たくさんかったのでもういまは、30個ぐらいあります。弟も小さいころウルトラマンが好きでときどき人形を買ってもらったりビデオのレンタルの店でウルトラマンのビデオをかりてきたりもしていました。今はその人形をわりばしでっぽうの的にしたりしています。ぼくは、

（小さいころ、人形でこんなことして楽しかったのかなー。）

と思いました。今もウルトラマンの人形はとっておいてあります。

（5年男子・南平小）

例55

ぼくが小さかったころいろんな人形があって手をさしこんで動かしてあそぶものやいろいろあったけど一番好きだったのが、ハムスターを大きくしたようなやつでした。いつもだいてねていたりしたそうです。その人形は、兄ちゃんも使っていたそうです。だからぼくが使った時もかなりきたなくなっていました。この

間、その人形をバザーで売れるかもしれないと思ってお母さんに出してもらったらかなり古くなって目がとれそうになっていました。ぼくは、
「なつかしいなぁ。」
と言ったらお母さんが、
「やっぱりとっとけば、思い出の品でしょ。」
と言ったのでぼくは、
「うん。」
といってまたしまいました。その人形は、まだとうぶんとってあると思います。　（5年男子・南平小）

2人とも「小さかったころ」に思いをはせている。恐怖心とはほど遠い心のやすらぎのようなものさえ感じられる。「なつかしいなぁ。」というのはイメージの邂逅性である。5年生になると「小さかったころ」を静かにふりかえることもできるようになるということなのだろう。

例56

小さい時、山形のおばあちゃんの家に行った時どうしても好きになれない人形があった。それは、古い日本人形でした。なんか見ているとこわくってしょうがなかった。その理由は覚えてないけれども、ともかくこわくってしょうがなかった事は覚えている。その夜その人形が置いてあるおばあちゃんのへやでねていた時、おばあちゃんに「この日本人形こわくない？」と聞いたらおばあちゃんは、「これは思い出の大切な日本人形だからこわくなんかないよ」と言ったのだった。その頃小さかった私はただ（こわくないんだ）と思っていただけだったが、今思いだしてみれば、その意味が少しわかるような気がする。もしかしたら、死んだおじいちゃんの思い出がその日本人形に入っているかもしれないし、おばあちゃんのお母さんの思い出が入っているかもしれない…。そう思っているうちに、おばあちゃんに悪い事を言ったかなーと思った。だっておばあちゃんの思い出が入っている日本人形を「こわい？」なんて聞いたりして…。

私も、思い出のつまったぬいぐるみを持っていた。いくらきたなくても大切なぬいぐるみだった…。けれどもある時お母さんにそのぬいぐるみを捨てられてしまった。すごくショックだった。いままでの思い出を捨てられたような気持ちだった。今はちがうぬいぐるみを大切にしている。お母さんには、もちろん捨てないでと言っている。お母さんには、ぬいぐるみなんて大事にして…と思われてるかもしれないけど…。なんかおばあちゃんの気持ちがだんだんわかってきた。だから今度山形へ行ってその日本人形を見たってもうこわくなんかないと思う。もしこわくってもおばあちゃんには「こわい？」なんて言わないと思う。
（5年女子・聖徳）

人形を思う思い方の変化を素直にていねいに追いかけている。思い方の変化は心の成長でもある。「もう『こわい？』なんて言わないと思う。」とあるが、この「こわい」と感じることについて述べたものもある。

例57

今、人形と聞いて、いろいろな思い出がうかびあがってきました。それと同時に恐しくもなりました。ぼくのたいていのこわい思い出は人形にあることも思い出しました。ぼくは、ぬいぐるみなら平気ですが、人形だけはいやです。人の形をしているのはいやですが、なによりあの目が恐ろしいです。人形と目があうと、なにか背すじが冷え、金しばりになったような気がするのです。人形の目がすうっと自分をつつんだかんじになって、その後自分がいままで犯した罰を全て見すかし、殺気だった目をにらませ、いまにも勝手に動き出しそうな感じになるのです。昔はそれを恐れて人形にはあまり近づきませんでした。人形の宝庫とも思える二階には階だんにも近づきませんでした。二階に一人にされた時はよく泣いたものです。今は、一人で二階に行けるようになりましたし、人形と目があっても殺されるような気になるどころか笑ってくれるように見えるようになりました。思えば昔はよく悪い事をして、母にしかられました。人形はそれを聞いて人形なりにしかってくれたのかもしれません。悪い事をすればにらみ、良い事をすれば笑ってくれます。もしかして、人形は人の心を映す鏡であり、仮の母役になってくれる役目を持っているんじゃと時折、考えます。
（6年男子・学習院）

例58

私は、お人形がきらいではないけれど、あまり得意ではありません。

書物は、本だなにある時はただの印さつされた紙です。けれど、だれかがその本を読み出した時から、主人公や風景は、読み手の心の中で形あるものとなって、動き始めます。心をかたむけて読んでいると、声が聞こえたり家族が一人増えたように感じることさえあります。

お人形も始めは、布や紙のかたまりなのですが人が見つめたしゅん間から、その人の心が視線という線にのっかって、お人形の中に入りこみ、お人形は物でなくなって「たましい」をもった生き物になってしまうような気がするのです。もしかしたら布やとうきの中で、ねむっていた人形のたましいが、人の心で見つめられたために、目を覚ましてしまうのかもしれません。一度目覚めてしまった人形のたましいは、大切にされた

り、見つめられたりするほど深くなり、気がついた時には、人は人形に見つめられているのです。人形が心をもった時から、人形は人間のおもちゃではなくなって人間の心を見ぬく力をもった生き物になってしまうのです。人は人や自分をだませたとしても、動かぬ目でじっと人の心の底を見ぬく人形をだますことはできないのです。

私は、おひな様や、長い間人々に大切にされてきたアンティクドールを見るたびに、お人形に見つめられている気がして、こんなことを考えてしまうのです。

だからお人形がちょっと苦手です。

（6年女子・学習院）

人形の呪術性がこうまで強いのは、人形には、人間の存在にかかわる重要な問題がつきまとっているからだということがわかる。人形が思い出とからみあうようになると、人形は人間にとっての鏡にも、母役にもなることができる。人形は人間の分身なのか、はたまた人間が人形の分身なのか。子どもたちが人形を捨てられないとくり返していた理由もこれで明らかになった。

例59

人形はなんのために作られたのだろう。だれもが一番最初に考える事は遊び物とかかざる物だと思う。はたして、それだけなのだろうか？

私が人形に対して一番不思議に思う事は、どうしてもすてられない事である。おもちゃはいらなくなったり、こわれたりするとすぐ捨てられるが、人形はちがう。どんなにきたなくなっても、もう使わないと思っても、どうしてもすてる事ができない。妹なんか自分が生まれた時に買ってもらった人形をまだもっている。捨てられない理由は二つある。

小さい子は、まだ、親友なんていないから、そのかわりにお人形で遊んでいる。ようするに人形は、小さいころの親友ともいえるのだからずっと捨てられないのだろう。又、ずっと一緒にいたのだから、とう然色々な思い出がその人形につまっているのだと思う。だからその人形につまっているのだと思う。だからその人形を捨ててしまえば、小さい頃の思い出も失う事になる。人形を捨てられない理由は、小さいころの思い出を捨てられない理由は、小さいころの思い出をわすれたくないから。いや、わすれられないからだと思う。人形というのは、私たち一生の大切なアルバムだ。（6年女子・学習院）

この人形アルバムを宝物と呼ぶ子もいた。人形と思い出を分かちあいながら共に生きるというのが子どもと人形の自然な姿であるように思える。

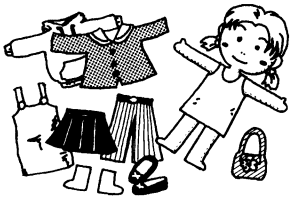
10 おわりに

幸いなことに我々は「人形」作文から多くの収穫を得ることができた。予見性、邂逅性、没我性、祈祷性といったイメージ運動の性質について再度確かめることもできたし、トランスフォーメーションを起こすきっかけとして、「穴」「留守番」「夢」と同じような働きかけができるのだということもわかった。

「人形」によって引き起こされたイメージ運動の偏向性としては、なんといっても「呪術性」が中心になる。「かわいらしさ」と「おそろしさ」が隣りあわせにあって心がときめくのである。人形が人間になったり、人間が人形になったり、人形にどうにかしてもらえばあの世にだって、簡単に行くことができる。子どもが生死の問題を簡単に考えているというのではない。人形を思うとき、どうしても生命への思いが沸き上がってくるというのである。子どもの思いは宇宙の生命へと伸びて行く。自分ひとりの寿命を越えて、くりかえしくりかえし永遠に続くであろう生命といったものへ思いが伸びていく。

「人形」に思い出がからまるという点も興味深いところである。思い出といっても、過去のあるでき事というようなポイントとしてのとらえ方ではなく、あくまで今日につながり生き続けている状態、今も体の中に流れている思いとしてとらえられている。子どもの時間観というのは流れの体感とも言えるのではないだろうか。今回、高学年の子どもの作文を読んでいてそう思うことが多かった。

人形が「思い出のアルバム」になっていたり、「母親役」「人の心を映す鏡」にもなっていたり、人形を思うことで、子どもが自分の存在を感じていることもわかった。

いつものことではあるが、今回もまた子ども達にイメージ運動のエネルギーとスケールの大きさを教えられた。元気にたくましく生きている子どもの心の世界に出会えたことを幸せに思う。

（日野市立南平小学校教諭）